普及情報

集落ぐるみの観光果樹園づくり

1 はじめに

出石町は、落ち着いた町並み、皿そば等により、年間100万人の観光客が訪れる観光地である。

歴代町長は本町を「観光と農業のまち」と表現してきたが、観光と農業をどう結びつけていくかが最大の課題であった。その取り組みとして出石町の片間区（40戸）の事例を紹介する。

2 半信半疑の園地造成

1991年、片間区は新農村地域定住促進事業にかかわり、集落有地約2haの畑地を造成することになった。都市住民との交流拠点としての観光農園で、管理運営を区にまかせるというものである。

普及センターは、懐かしさ・機能性をポイントとしてブルーベリー・ユスラウメ等の小果樹に着目し、区役員と相談して着工前から試作をスタートさせた。集落の世論は「村の山に道がついたらええがな」であり、半信半疑の園地造成であった。

3 大きくならないブルーベリー

ブルーベリーは、ハイブッシュ系とラビットアイ系の2系統に大別される。当園はもぎ取りを視野に入れ、ハイブッシュ系を導入（ダロウほか25a）したものの2年生で樹高30cmしか大きくならなかった。

原因は数々ある。造成畑は他地域同様に排水不良、土壌酸度不適、有機物不足、苗は鉛筆ほどの線香苗、植栽方法などの問題があった。集落管理の欠点は管理作業が雑になることである。

対策として、ピートモスの株元多量施用、ソバガラ、モミガラの表層マルチ、中間育苗の導入などを講じた。その結果、樹勢が強くなり、収量が向上してきている。ラビットアイ系（ティフブルーほか5a）はハイブッシュ系より樹勢が強く、小粒で熟期が遅いものの、当地では明らかに作りやすい。

4 観光果樹園はもぎ取りより、うどんを食わす！

「観光農園のもうかるポイントは、もぎ取りそのものではなく、その横でうどんを食べさせること」と言われている。

ブルーベリーのもぎ取りだけでは物足りない。厚みのある農園を試行錯誤するなか、旧北部農業技術センター加工流通部（現部長（食品加工流通担当））の指導により、好評のブルーベリージャムも作出した。また、ブルーベリーの収穫時期と開花期を同じくするラベンダーの植栽に踏み切った。「ブルーベリーのもぎ取りと、ラベンダーの摘み取り」が売りものとなった。

昨年、神戸新聞のイイミミのコーナーで紹介された「城下町出石に、親切な農園あり……」これは、集落にとって最高の励ましになり、外部評価は農村に活力を与えている。駐車場もなく不便な処ながら、本年は4千人の入り込みを目指している。

池口　直隆（ 豊岡普及センター）

【技術的課題と対策】

課　題	対　策
鳥獣害の対策	防護柵（自治振）と防雀網
開墾土壌で土が未熟	ソバガラ、モミガラの表層マルチ
ブルーベリーの生育不良	ピートモス、中間育苗、品種選定
除草の対策	ヘアリーベッチ、ナギナタガヤ
ラベンダーの株枯れ	植栽方法、品種選定、剪定方法
ブルーベリーの加工	ブルーベリージャム
ラベンダーの加工	スティック、ピロウ等